月刊 FALCOM MAGAZINE

Vol.119



『軌跡』シリーズ始まりの物語を振り返る

英雄伝説 空の軌跡

メインストーリー終章がスタート！

『英雄伝説 暁の軌跡』

ファルコムニュース

ハーケン門に帝国の影
次期女王が下した決断とは

英雄伝説 空の軌跡SC ～絆の在り処～

今年も大忙し！　ザナドゥの年忘れ！

も～っと集まれ！ ファルコム学園

『軌跡』シリーズ2021年最新作の舞台はカルバード共和国!!

『英雄伝説 黎の軌跡』



FALCOM MAGAZINE

CONTENTS



プロローグ

『裏解決屋（スプリガン）』——
カルバード共和国という多様性の坩堝から生まれた、
ある種の“裏稼業”。

ある時は探偵（ディテクティブ）として、
ある時は交渉人（ネゴシエイター）として、
またある時は賞金稼ぎ（バウンティハンター）として、
彼らはどんな、そして誰からの依頼でも受ける。

警察では扱い切れない依頼の下請け、
市民からの“表沙汰にできない”相談事、
更には犯罪者やアンダーグラウンド勢力の“真っ当な”依頼も。
それが、『裏解決屋』と呼ばれる彼らの流儀であった。

時に、七耀暦 1208 年——

共和国首都・旧市街にある古ぼけた雑居ビルを
名門校の制服に身を包んだ、
いかにも育ちの良さそうな一人の女生徒が訪れていた。

『アークライド解決事務所』

素っ気ない文字で書かれたそのプレートを、
凛とした眼差しで見つめる少女。
コクンと喉を鳴らし、意を決してノックを三回。

…………

『～ふわああっ、昼前に珍しいな……』

だらしないようで落ち着いた、
大人びているようで意外と若い男の声が響き、
ドアノブがゆっくりと回り出す。

——ここから、
新たな“軌跡（ものがたり）”が始まる。











共和国編——始動!!
『軌跡』シリーズ最新作『黎の軌跡』が2021年に発売決定！

THE LEGEND OF HEROES 黎の軌跡 クロノキセキ

『英雄伝説 空の軌跡 FC』からスタートした『軌跡』シリーズ第 11 作目となる最新作『英雄伝説 黎（クロ）の軌跡』が 2021 年に発売されることが明らかとなった。今作の舞台は『閃』の舞台となったエレボニア帝国と覇を競いあっていた大国・カルバード共和国。東西に長く伸びる国内には様々な文化が入り交じっており、これまでのリベール王国、クロスベル自治州、エレボニア帝国とはまた違った雰囲気になっていること間違いなしだ。

また今作では、これまでのシリーズでお馴染みだったコマンド型 AT（アクションタイム）バトルシステムが一新されており、アクション型フィールドバトルからコマンド型ターンバトルへとシームレスに移行するスピーディなバトルになっているとのことだ。

それでは今回発表された最新情報の数々をチェックしていこう。

タイトル：英雄伝説 黎の軌跡　**発売日**：2021年予定
ジャンル：ストーリー RPG
対応機種：未定　**プレイ人数**：1人
小売価格：未定　**CERO レーティング**：審査予定

★単行本第2巻、絶賛発売中だにゃあ……★



しわっす



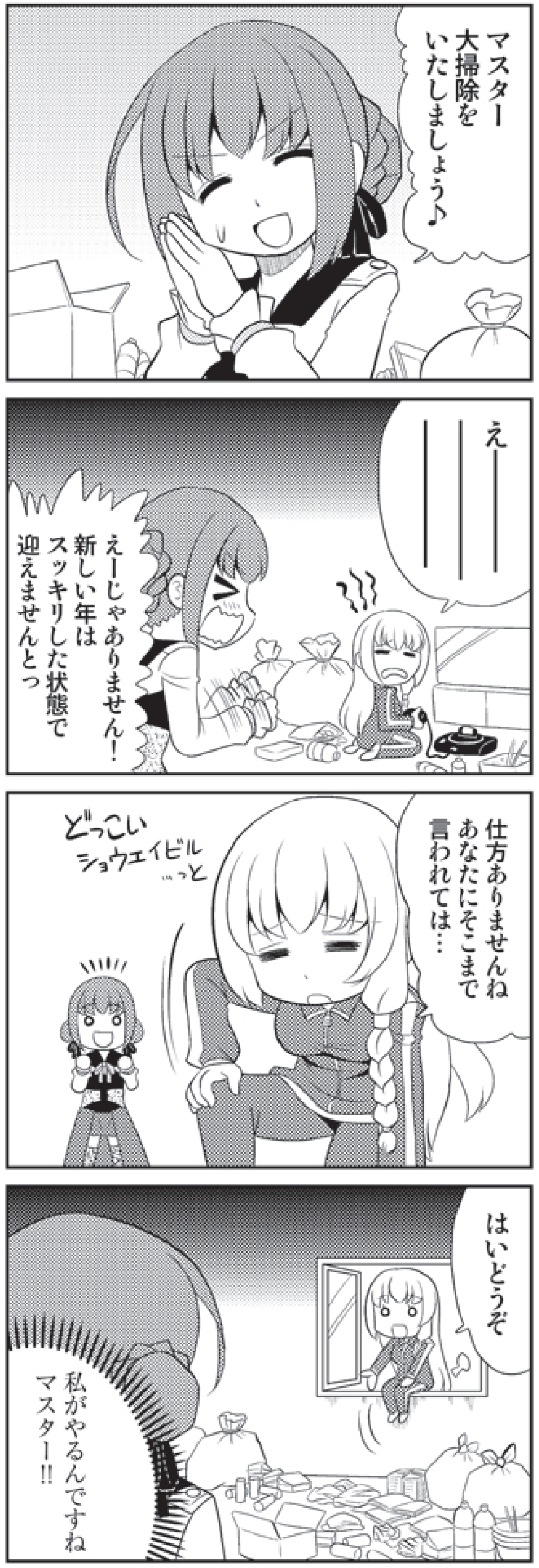
師走の校長



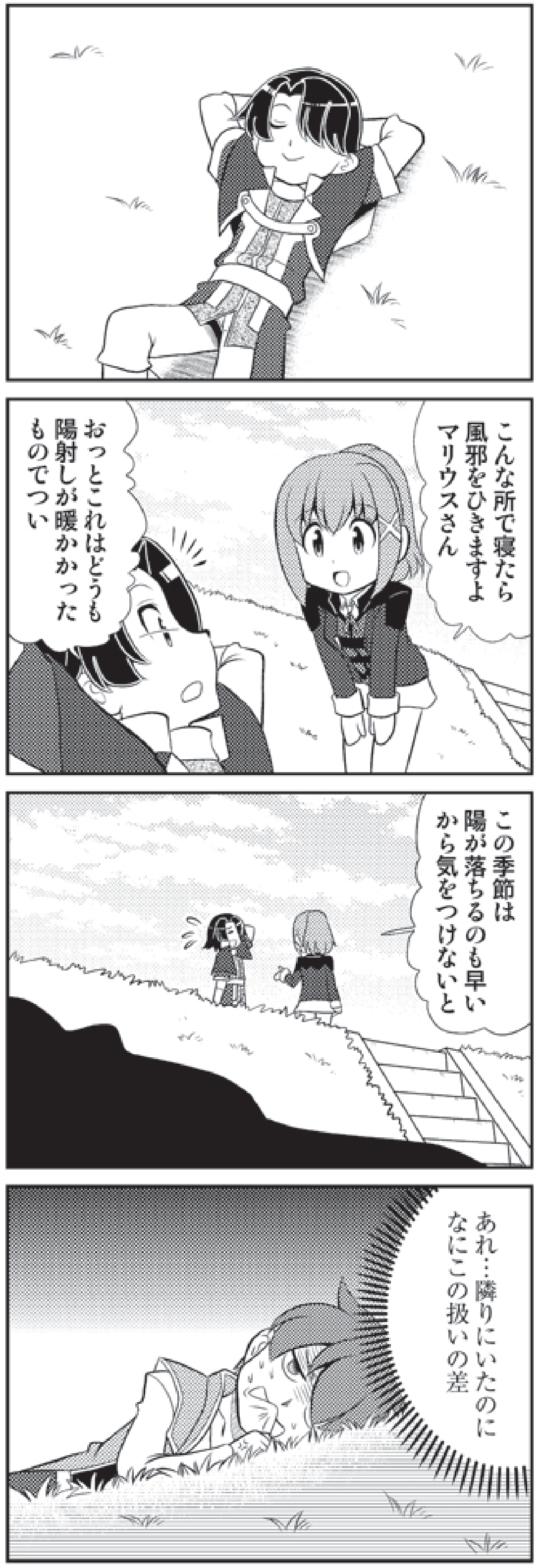
こたつダイブ



重すぎた腰



昼寝日和



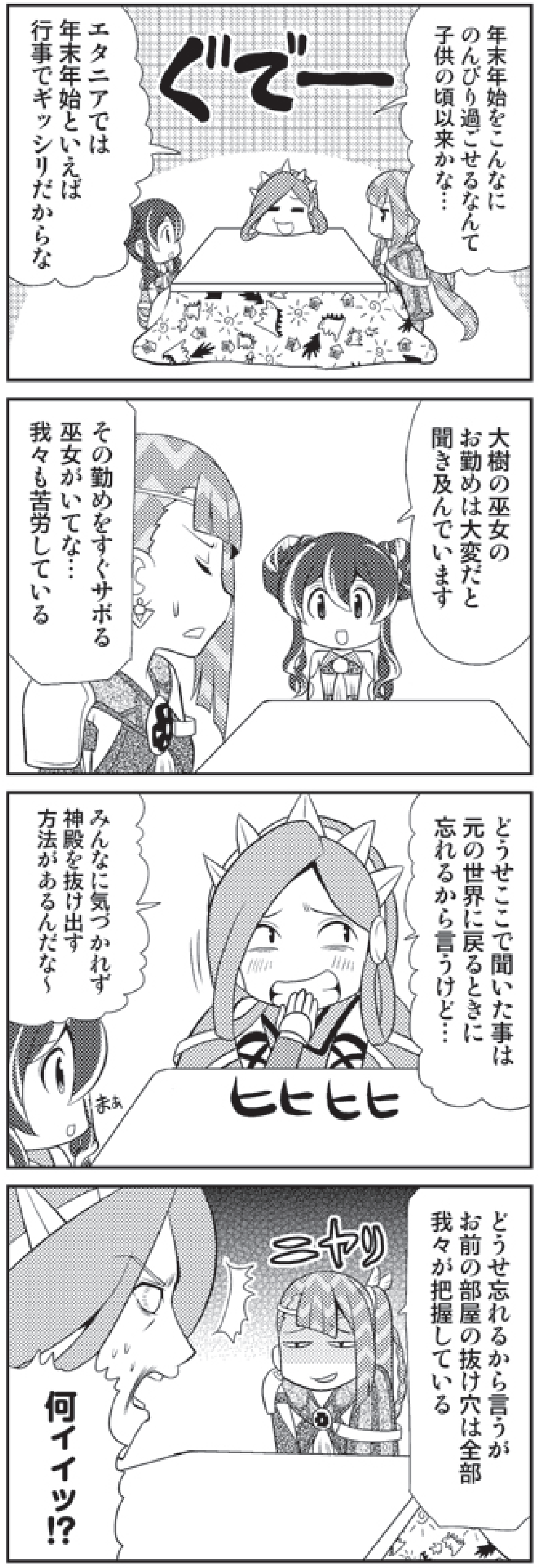
俺の視線はヴォーパルウェポン



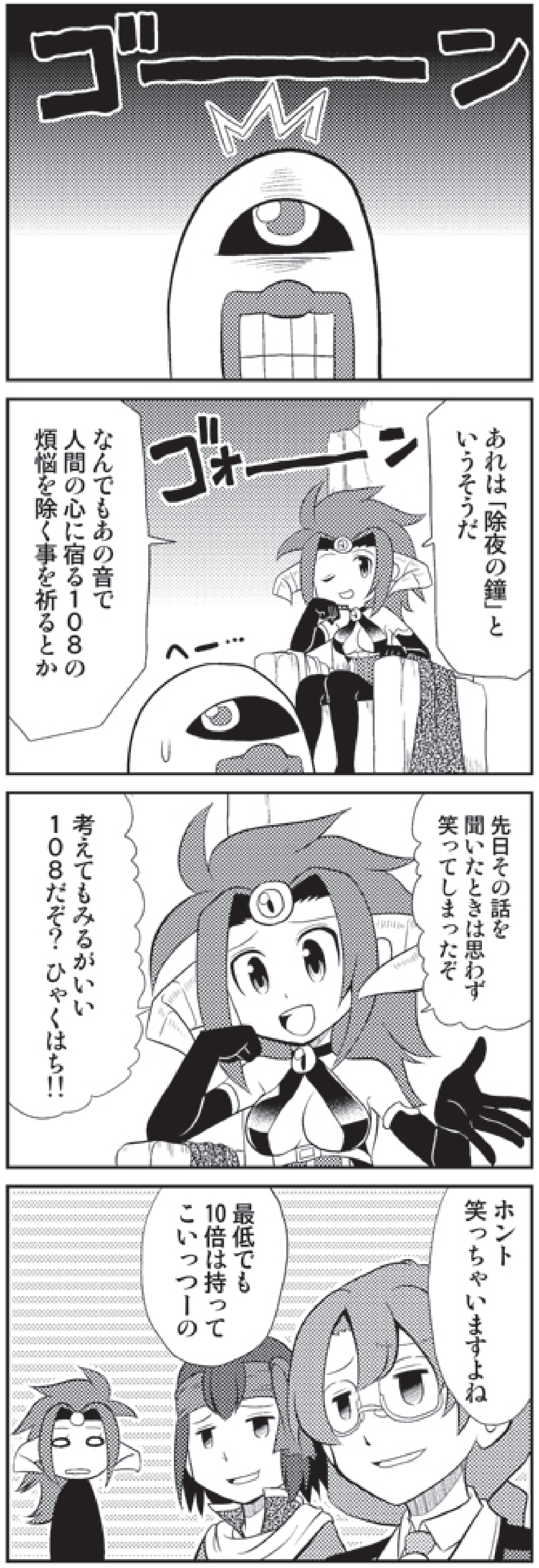
ガッシュ家の年末



巫女のお勤め



底なしの業



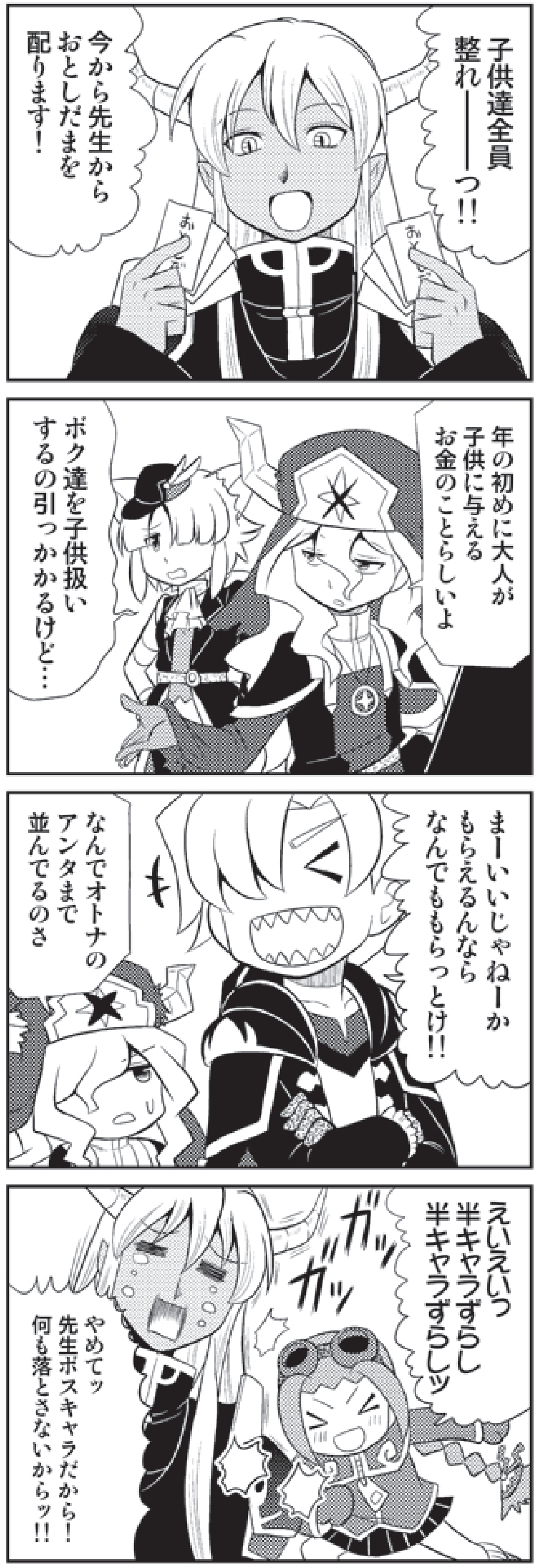
北米版カウントダウン



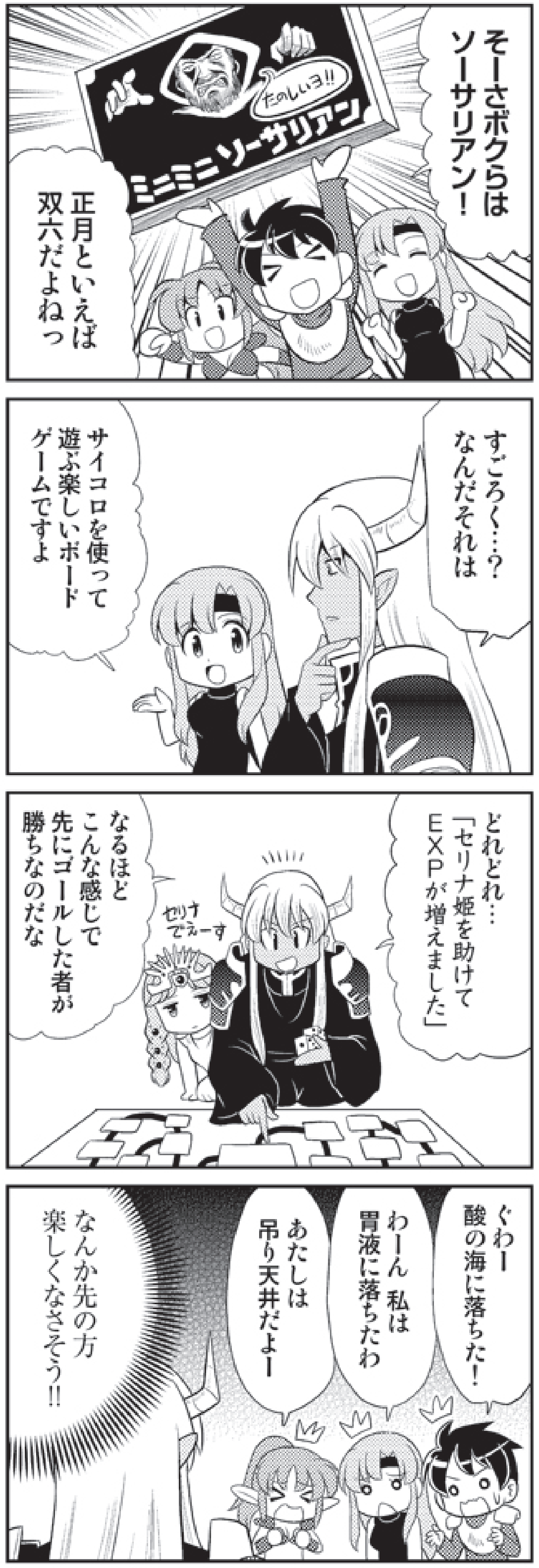
今年の干支



おとしだま



ミニミニソーサリアン



イケる口

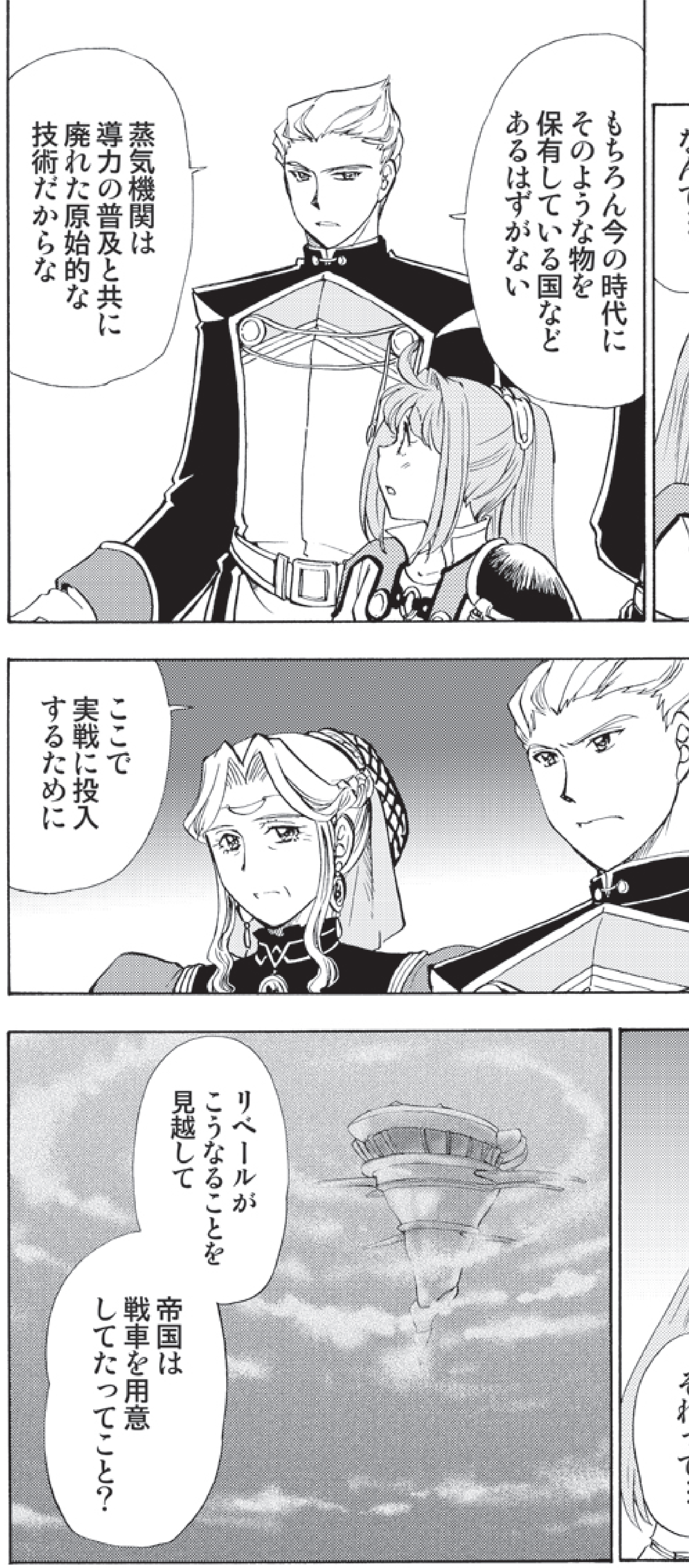



英雄伝説
閃の軌跡06
原作／日本ファルコム
脚本／恵村まお　漫画／さがら梨々
A5判　160P　定価：本体991円+税
ISBN 978-4-8021-3123-0
©Nihon Falcom Corporation. All rights reserved.
©SAGARA RIRI 2018
好評発売中!!
エレボニア帝国に吹き荒れる陰謀の嵐！
時代が選ぶのは果たして誰か!?
そして友という絆に背を向け、
両雄相まみえる！
激動のクライマックス！


穏やかで騒がしい生活が戻ってきたファルコム学園。
徐々に英雄、戦士、さらには曲者までが還ってくるなか、
新たに「イースⅨ」のキャラクターも参戦！
まだまだ止まらない異能・新久保だいすけの筆が冴え渡る！
おまたせ！待望の第2巻だよ！
も〜っと集まれ！
ファルコム学園②
新久保だいすけ
定価：本体 900 円+税
ISBN 978-4-8021-3213-8
©Nihon Falcom Corp. All rights reserved.　©DAISUKE ARAKUBO　©2020 FIELD-Y


ええっ!?
エレボニア帝国が
リベール王国に!?
空の軌跡 SC
～絆の在り処～
漫画 啄木鳥しんき
原作 日本ファルコム
ど…どうして
こんな時に？
軍勢というのは
どの程度の規模
なのですか？
なんの用で
帝国の軍隊が
リベールへ
やってくるの？
現時点では
一個師団程度の
ようなのですが…
そ…
その中に…


戦車部隊が
存在するらしく…
戦車!?
バカな!
導力停止現象の
リベール国境において
どうして戦車が
動かせる!?
まさか帝国も
結社と同じ技術を
使っているの!?
いえ
どうやらその戦車は
導力機構を
搭載していない
タイプのようなのです
観察した限りでは
導力革命以前に
使われていた
「蒸気機関」で
動いているとか…


導力革命以前って大昔の話じゃない
そんな時代の戦車なんて…
もちろん今の時代にそのような物を保有している国などあるはずがない
蒸気機関は導力の普及と共に廃れた原始的な技術だからな
だが帝国はあえてそれを秘密裏に製造していたというわけか
ここで実戦に投入するために
そ…
それって…
リベールがこうなることを見越して
帝国は戦車を用意してたってこと?


また
10年前と同じように
帝国と王国の戦争が
始まろうとしているの…!?


だめよ！
そんなの！
そんなの
絶対に
止めなくちゃ！
しかし…どうしますか
結社の襲撃で
王都にいる兵は
皆負傷していますし
たとえ援軍を
派遣できたとしても
戦車部隊が相手では
結果は火を見るより
明らかです


だからと
いって
おふたりを
ハーケン門へ
行かせるわけにも
いきません
今度の事件で
結社は王都を
人質に取って
しまいましたから
その気になれば
いつでも王都を
狙える…と
いうことか
おそらく父は
あなたを
緊急事態が
発生した時の
とっておきの隠し札にと
考えていたはずです
ですが
そのカードは
すでに
切られてしまった
《身喰らう蛇》…
そこまで
狙って
いたのか…


話は
わかりました
では
ハーケン門には
お祖母様
どうか
私を
ハーケン門に
行かせて
ください


え？
クローディア
…帝国と我が国の間には
先日 不戦条約が
締結されたばかりです
いくら帝国といえど
この条約の建前上
正当性のない侵略行為は
はばかられるはず
そこに
リベール王国の
最高権威が
現れれば
帝国軍も
話し合いの席に
着かざるを得ない
でしょう
ならば
まだ
交渉の余地は
残っていると
思います


クローゼ
私は
お祖母様の代理として
リベール王国の次期女王として
必ずや帝国軍との交渉を成し遂げてみせます


その交渉人にあなたがなるというのですか？
一介の学生であるあなたが
…いいえ
お祖母様
こんな時に申し訳ありません
まだ…お祖母様のお考えが変わっていなければ…
…今すぐ
立太女の儀を執り行ってください

運命に導かれるように再び出逢ったエステルとヨシュア。同時に、世に混乱を求める《身喰らう蛇》の秘密計画が実体となって姿を表す。リベール王国全土を巻き込む混沌の行方は!?緊迫の第5巻!



著者:啄木鳥しんき
原作:日本ファルコム

定価:本体 900円+税
ISBN 978-4-8021-3211-4

発行:フィールドワイ
発売:メディアパル
フィールドワイ公式HPはこちら→ www.field-y.co.jp
ファルコムブックス公式HPはこちら→ www.field-y.co.jp/falcombooks



▶ファルコムニュース◀

ファルコムファンに贈る最新ニュースをピックアップ！

PSストア『BIG Winterセール』開催中！

シリーズ最新作『英雄伝説 黎の軌跡（クロノキセキ）』発表を記念して『英雄伝説 創の軌跡(はじまりのきせき)』DL版ほか、『イースⅧ』や『閃の軌跡：改』シリーズなど、人気作が期間限定のプライスダウンで大セールを実施中。この機会を逃さずに！

PS4「英雄伝説 創の軌跡」



40% OFF

PS4「英雄伝説 閃の軌跡Ⅰ：改 -Thors Military Academy 1204-」



30% OFF

年末年始は

ファルコムタイトルがお得！

セール期間 2021年1月8日(金)まで

PS4「イースⅧ -Lacrimosa of DANA-」



30% OFF

PS4「イースⅧ -Lacrimosa of DANA- スーパープライス」



40% OFF

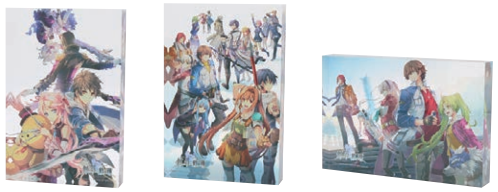


※「英雄伝説 創の軌跡」はデジタルデラックス版もセール対象となります

「キャラ印」から『創の軌跡・軌跡シリーズ』新作グッズが続々登場！

TOSYO株式会社のグッズ通販サイト「キャラ印.com」に新作グッズとなるACアダプターをはじめ、普段使いにも便利な白雲石コースターなど、『創の軌跡・軌跡シリーズ』のオリジナルグッズ全6種・計26アイテムが一挙ラインナップ！

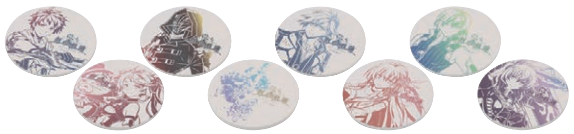
■アクリルブロック　全3種／各3,800円（税別）



■ジグソーパズル　全4種／各4,000円（税別）



■白雲石コースター　全8種／各1,200円（税別）



■ACアダプター［全9種］　1,800円（税別）



■アクリル卓上時計　3,800円（税別）



■アクリル壁掛時計　5,000円（税別）





《キャラ印 販売ページ》
https://www.charain.com/user_data/hajimarinokiseki

『創の軌跡』のビジュアルがこの一冊に集約！近藤社長のネタバレ＆次回作インタビューも『英雄伝説 創の軌跡 公式ビジュアルコレクション』満を持してついに発売！

日本ファルコムが贈る人気ストーリーRPGシリーズの最新作『英雄伝説 創の軌跡』。そのイメージビジュアルやキャラクターイラストを多数掲載したビジュアルブックが電撃から登場。
本書初公開の設定画や絵コンテ、エンディングビジュアルなども収録しているほか、日本ファルコムの近藤季洋社長が語る、本作の物語やキャラクターについてのネタバレインタビューも必見です。これを読めば次回作についても明らかに!?



■発売日：2020年12月28日
■定価：2,700円＋税
■仕様：A4判／224ページ
■発行：株式会社KADOKAWA Game Linkage
■発売：株式会社KADOKAWA

英雄伝説 零の軌跡

午後の紅茶にお砂糖を

著者：むらさきゆきや
イラスト：窪茶



日本ファルコムの大ヒット RPG『英雄伝説 零の軌跡／碧の軌跡』の主人公【特務支援課】は意外とまったり!? 本編とはひと味違った彼らのゆる～い毎日を描いて『月刊ファルコムマガジン』で大人気を博したノベライズ作品が単行本で登場！

好評発売中!!

定価：1,100円+税
ISBN：978-4-89610-255-0

発行：フィールドワイ
発売：メディアパル
フィールドワイのHPはこちら→ www.field-y.co.jp

英雄伝説 零の軌跡

四つの運命

著者：田沢大典　イラスト：松竜



日本ファルコムの大ヒットRPG『英雄伝説 零の軌跡』から、ロイドたち特務支援課の過去エピソードを描いたオフィシャルノベライズ。ゲーム本編では語られなかった名シーンの裏側やキャラクターそれぞれの心情が今、明らかになる！

原作：日本ファルコム
（『英雄伝説 空の軌跡』）

価格：1,155円(税込)
ISBN:978-489610-215-4

全国書店にて大好評発売中!!

発行：フィールドワイ
発売：メディアパル
フィールドワイのHPはこちら→ www.field-y.co.jp

12月の新／衣装替えキャラクターをチェック！



Xmas・アルティナ

「黒兎（ブラックラビット）」のコードネームを持つアルティナは真っ赤なサンタクロース姿に。頭のトナカイの飾りや首元のベルがなんとも可愛らしい。

晴着・アリサ

アリサは来る新年に向け、艶やかな晴れ着姿を披露！　衣装に合わせてアレンジしたヘアスタイルがとても良く似合っている。初詣に一緒に行く相手はもちろん……？
※12月30日実装予定

Xmas・ミレイユ

毎年恒例となったクリスマス衣装。ミレイユは大人の女性らしくシックなサンタクロースに。ミレイユサンタがどのような贈り物を"誰"にプレゼントするのか。気になるところだ。

1月の新規衣装替えキャラクターは？

THE LEGEND OF HEROES 暁の軌跡

アカツキノキセキ

毎月魅力的な新キャラクターや衣装替えキャラクターが大注目の『英雄伝説 暁の軌跡』。
12月はついにメインストーリーが終章に突入！　その第1弾が実装となった！

『英雄伝説 暁の軌跡』公式ホームページ
http://akatuki.ujj.co.jp/

公式ツイッター
https://twitter.com/akatsuki_ujj

メインストーリー終章 第1弾「宣戦布告／前篇」が実装！

突如、公宮上空に現れた巨大飛行船“ヨルムンガルド”
闇夜を支配せんとするその姿にアーデント市民は大混乱に陥った。
試験班、遊撃士協会、仮設工房、公都警察はそれぞれ対策を模索するが……。









※画像は開発中のものです。　※上記のイベントは状況により内容の変更を行う場合があります。

「ダルモア市長、あんたよっ！」
「なっ！」
わずかにたじろいだが、すぐにダルモアは立ち直った。顔を真っ赤にさせながら、
「何を言い出すんだ、君たちは！　無礼にもほどがあるぞ！　そんなでたらめを――」
「残念ながらでたらめなどではありません。市長……」
ヨシュアは落ち着いた声音を崩さずにゆっくりと言葉を並べ立てた。
「秘書のギルバートさんはすでに現行犯で逮捕しました。孤児院の放火と寄付金の強奪を指示したのは市長であるあなただと、実行犯である者たちからの証言も取れています」
「そんな怪しげな黒装束の連中の曖昧な証言など当てになるものか！」
「あれぇ、あたしたち黒装束だなんて一言も言ってないんだけど？」
エステルの言葉にダルモアが初めてうろたえた。
語るに落ちるとはこのことだ。
「知らん。まったく知らんぞ。そ、そうだ。すべては秘書が勝手にやったことだ！」
往生際が悪かった。だがそれならそれで時間稼ぎにはちょうどいい。どのみちエステルたちでは、市長は逮捕できないのだ。この場所に釘づけにしておけるなら好都合だ。
「高級別荘地を作る計画があるそうですね？」
ヨシュアが不意に話題を変えた。

英雄伝説 空の軌跡2 ～黒のオーブメント～

『創の軌跡』の発売を記念して
『軌跡』シリーズの原点を振り返る！

第6回



リベール王国を舞台とした『英雄伝説 空の軌跡』、クロスベル自治州を舞台とした『英雄伝説 零の軌跡』と『英雄伝説 碧の軌跡』。そして、エレボニア帝国を舞台とした『英雄伝説 閃の軌跡』。これまでゼムリア大陸西部の各国を舞台として物語が紡がれてきた『軌跡』シリーズだが、最新作『英雄伝説 創の軌跡』は、これまでのシリーズに登場したキャラクターや世界観をより掘り下げていく作品ということで、シリーズの原点ともいえる第１作『英雄伝説 空の軌跡 FC』ノベライズを好評連載中！

製品情報
好評発売中
著　　　:はせがわみやび
イラスト:ワダアルコ
定　価:1,200円(税別)

「あ、ああ」
「海沿いの土地を別荘地にする予定とか。景観上、孤児院が邪魔だったのではありませんか?」
「……確かにそのような計画は存在する。だがそれは、ルーアン地方の経済発展を考えた事業計画のひとつとして昔からあるものだ。いま犯罪に手を染めてまで性急に推し進める類のものではない」
「動機にはなりえない、と?」
「そ、そうだ! それとも私に罪を犯してまで別荘地を作らねばならない理由があるとでもいうつもりか?」
「そ、それは……」
エステルが口籠ったのを見たからだろう。ダルモアはさらに声の調子を強めた。
「どうなんだ! 私を告発するからには、そのあたりまで証拠があるんだろうな!」
しまった、とエステルは思う。確かにダルモア自身の動機までは調査していない。
秘書の言葉を聞き、ダルモアが孤児院を排除したがっていると判って、それで納得してしまっていた。
「さあ、どうなんだ! 市長に向かって侮辱の数々、もし根拠がないというのなら、名誉棄損で訴えさせてもら――」
市長の言葉を遮ったのは、低い男の声だった。

「莫大な借金を抱えているからでしょう?」
部屋の中の全員がいっせいに振り返って声の主を見た。
いつの間にそこにいたのか。開いた扉に手をかけて、よれよれのネクタイをだらしなく引っ張りながら男がにやりと笑っていた。
「ナ、ナイアル!」
リベール通信社の新聞記者ナイアル・バーンズだったのだ。
「どうしてここに……」
驚いたのはヨシュアもだ。
「市長に取材を申し込みに来たところだよ。そうしたら、おまえさんたちが何か面白そうな事をやってたんでね。こっそりと後を追って一部始終を聞かせてもらった」
「な、なんだ貴様は⁉」
「俺ですか? 《リベール通信》の記者、ナイアル・バーンズといいます。実はですねぇ。最近のルーアン市の財政について調べさせてもらったんですが……」
ナイアルが手帳を取り出して開きながらぺらぺらとしゃべりだす。
その内容はといえば、驚くべき告発だった。
市の予算をダルモアが私的に使い込んでいるというのだ。
ナイアルの指摘に一瞬だけ顔色を変えたダルモアだったが、すぐにそれは別荘地造成の資金

だと言い張った。
「まだ工事は一切始まってないのに？」
「む、それは……」
ここでナイアルは不意に質問を変える。
「市長、あなた一年ほど前に共和国方面を度々訪れてましたねぇ？」
「……ただの観光だが？」
「それは表向き。本当の理由はそのとき相場に手を出して大火傷を負ったんでしょう？」
ナイアルの切り込みに、ダルモア市長は今度こそ本当に答えに窮したのだ。どうやら核心を突いたらしい。
ただ、エステルには判らないこともあった。
「えっと……相場ってなに？」
恥ずかしかったが、聞くは一時の恥というし。エステルの問いに答えてくれたのはクローゼだった。
「市場の価格差を利用してミラを稼ぐ売買取引です。安いときに買って高くなったら売るわけです。高くなれば――ですが」
「ならなかったら？」
「損します」

なるほど、とエステルはなんとなく理解した。おそらく共和国とリベール国との間の価格差とやらを利用して儲けようとしたのだろう。
「で、この市長さんはどれだけ損しちゃったわけ？」
「俺の調べだが……およそ一億」
エステルの脳が数字を把握できずに凍りつく。
（え……？）
徐々にナイアルの言った数字が理解できてきた。
「い、い、一億ミラぁ～!?」
「寄付金の百倍ですね。そういえば、市長も寄付金を収められていたようですが……。なるほど、それだけの借金額からみれば、カモフラージュに多少の寄付もありえるかと。もとより最初から取り返すつもりだったのでしょうし」
淡々とヨシュアが言った。
「ヒック、一億とはな。私もミラ使いは荒い方だが、さすがにおぬしには完敗だぞ……」
デュナン公爵が感心したように言ったが、そこに感心してしまっては何かが間違っている気もするエステルである。
「まあ、そんなわけで、莫大な借金を返すために市の予算に手を付けたはいいが、問題の先送りをしただけ。そこで別荘地を作って金持ち相手に荒稼ぎしようと思いついた。こんなところ

ですかね、市長」
「……証拠はあるのか」
　顔を伏せて口籠っていた市長が、黄泉路の果てから聞こえてきそうな昏い声で叫ぶ。
「証拠だ証拠！　憶測だけで言うならば名誉棄損で訴えてやるからな！」
「おやま、開き直った」
　ナイアルが呆れたように言った。
　だが、ダルモアはもはやナイアルの言葉など聞いていない。
「おまえらもだ！」
　エステルたちの方へと向きなおると、歯を剥きだして「出ていけ！」とわめきだしたのだ。
「おまえら遊撃士たちには私を逮捕する権利はないはずだからな！」
「やっぱりそう来たか」
　ダルモアは愚か者かもしれないが馬鹿ではなかったようだ。
「市長、ひとつだけお伺いしてもよろしいですか？」
　そう切り出したのは意外なことにクローゼだった。
「王立学園の生徒か。こんな輩と付き合っとらんで、さっさと学園に戻りたまえ！」
　わめき散らすダルモアをクローゼは静かな瞳で見つめた。
「うっ。な、なんだ……きさま……」

† † †

「市長……」
　クローゼの瞳には力があった。見つめているだけなのに、おとなの男であるダルモアが気おされている。
「どうして、ご自分の財産で借金を返そうとなさらなかったんですか。名だたる大貴族であるダルモア家の資産があれば、無理な額ではないはず。この屋敷を売るだけでも……」
「馬鹿なことを言うな。この屋敷は代々先祖から受け継いだダルモア家の誇りだぞ！」
「あの孤児院だってそれは同じです……」
　哀しみの色に瞳を染めてクローゼは言った。
　懐かしい孤児院の想い出がエステルの心にも蘇る。クローゼの作ったアップルパイの香り、はしゃぐ子どもたちの声、穏やかなテレサ先生の瞳。
　失われてしまった心安らぐあの場所。
「は！　あの、みすぼらしい建物とこの偉大なる屋敷を一緒にするな！」
　言ってはいけない一言をダルモアは言ってしまった。
　クローゼの瞳の冷たさがいっそう増して、冷ややかに見つめる視線にダルモアは凍りついた

ように口を閉じた。
「可哀想な人……」
クローゼの言葉は、ダルモアにこう言っていた。
もはや言い訳など聞きたくはないと。
少女の信頼を市長はたったいま永遠に失ったのだ。
俯いていたダルモアが急に顔をあげた。
「ふふ……ふふふふ……よくぞ言った、小娘風情が。もはや後の事などどうでもよい！」
言いながら、ダルモアは部屋の後ろにあった扉へと駆け寄る。
後ろ手に扉の取っ手を掴み、一気に引き開けた。
「ファンゴ、ブロンコ！　エサの時間だ、出てこい！」
扉の先は窓もなく明かりも点けていない真っ暗な部屋だった。
エステルたちのいる大広間から射しこむかすかな明かりを受け、大柄な生き物がむくりと身体を起こす。

グルルル……！

喉の奥から唸るような声が聞こえてくる。

「な、なんなの？」
「獣の臭い……！」
開かれた部屋から、かすかな獣の臭いが漂ってくる。明かりを返して目玉が光った。
ゆっくりと二体の巨大な生き物が姿を現した。
ナイアルが獣を指さしながら叫ぶ。
「な、なんだありゃ！」
「魔獣……ですね」
ヨシュアが言った。
二体の魔獣が大広間に入ってくる。
見た目は狼に似ていた。かつて関所で戦った奴らと姿かたちは似ている。ただ、身体の大きさは倍ほどもあった。全身を覆う毛は銀に近い白と闇に近い黒。開いた顎から覗く牙は太く尖っていて、人の身体など簡単に噛み千切ってしまいそうだ。
「屋敷の中に魔獣を飼っているなんて……」
信じられないとクローゼがつぶやく。
「くっくっく。こいつらが喰い残した分は川に流してやるから安心して喰われたまえ！」
ダルモアがひきつるような高笑いをあげた。狂気を含んだような声だった。
「こいつぁだめだ。正気じゃねえ……」

さすがのナイアルも、ダルモアから一歩二歩と後ずさって距離を取った。エステルとヨシュアが、ナイアルを庇うように前に出る。

「まさか屋敷の中でこんなのと戦うことになるなんて……」

「でも、これで現行犯だ」

ヨシュアが言った。

「人に飼われし魔獣といえど、人を傷付けるつもりならば容赦はしません！」

クローゼがきっぱりと宣言する。

腰のレイピアを鞘鳴りの音とともに抜いた。

それが合図になった。

ぐおう、と魔獣が吠えた。

身を屈めて、いつでも襲い掛かれる体勢になる。

エステルはあえて前に出た。

「エステル！　無暗に突っ込んじゃ危な――」

「大丈夫！」

ヨシュアの声を背中で聞きながら、エステルは二体の巨大狼のうち、身体のやや大きいほう――『ファンゴ』とダルモアが呼んだほう――に向かって突進した。

どう考えても、体格の大きいほうが力も強そうで、厄介そうだったからだ。だから、そいつ

はエステルが受け持つ。ヨシュアは短剣使いだから、不意討ちは得意だけれど、正面切って大柄な魔獣をけん制するのは苦手なのだ。

部屋の中を風を切って距離を詰め、留め金から外した両手持ちの棍をぐっと握る。踏み込んだ勢いを利用して、《六角棍》を風車のように振り回した。

（こっちは早く倒して加勢しないと！）

もう一匹の『ブロンコ』のほうは必然的にクローゼが相手をすることになった。彼女の腕を信頼していたが、遊撃士として一般人に何もかも任せるわけにはいかないだろう。

振り回した《六角棍》がファンゴの顎を引っぱたく。魔獣が哭いた。慌てて飛び退る。

「どうした、ファンゴ！　さっさとやってしまえ！」

ダルモアは既に自分の本性を隠す気もないようだ。

「そう簡単にやられますかってーの！」

ひと声吠えて、ファンゴが飛びかかってきた。尖った牙がエステルの首筋を狙って近づいてくる。だが、エステルにはファンゴの動きが見えていた。それだけではない。仲間の援護がくることも判っていた。

「エステル！」

ヨシュアの声とともに、ファンゴの鼻先で魔法が弾けた。ヨシュアが導力器を駆動させて援護の魔法を撃ってくれたのだ。魔法の水流を浴びてファンゴの牙の軌道は逸れ、エステルの顔

すれすれを通り過ぎた。
ガチン、と魔獣の顎が噛み合わさった音が耳のすぐ近くで聞こえた。ぎりぎりの攻防に、ぞくりとエステルの肌が粟立つ。だが、この瞬間がチャンスなのだ。
（今、だ！）
時間の流れがゆっくりになったかのように感じていた。魔獣の腹がエステルの身体の脇を通り過ぎようとするのが見えていた。
エステルの突き出した《六角棍》の先が、魔獣に向かって伸びてゆく。相手の勢いをそのまま利用した突きだった。棍の先が魔獣の腹に突き刺さった。
ギャン！　と犬のような鳴き声をあげて、ファンゴが床に落ちた。すかさず止めの一撃を撃ちこみ、叩き伏せる。
「ジーク！」
クローゼが叫んだ。
どこから入り込んだのか、シロハヤブサのジークが天井すれすれから羽ばたいて、ブロンコへと飛びかかってゆくのが見えた。猛禽類の名の通り、猛々しい声をあげて襲い掛かるジーク。爪が目元を切り裂き、ブロンコが悲鳴をあげた。
ひるんだ隙をクローゼは見逃さなかった。
レイピアが閃き、魔獣へと突き刺さる。

「これで、終わりです……」
ゆっくりとブロンコは倒れた。流れた血が絨毯を赤く染めてゆく。もう戦う気は失せたようで、弱弱しげな声で啼いている。目を伏せて、クローゼはレイピアを腰へと戻した。
「ば、馬鹿な……私の可愛い番犬たちが……」
静まらない荒い息を整えながら、エステルは「それはこっちの台詞だっての！」と返した。どこの世界に番犬に魔獣を飼うやつがいるというのか。それこそ「馬鹿な」と言いたいエステルである。
「諦めなさい！　ここが潮時ってやつよ！」
「遊撃士協会規約に基づき、あなたを殺人未遂の現行犯で逮捕します。投降したほうが身のためですよ」
ヨシュアが言った。
呆然とした顔のダルモアがヨシュアを見つめる。それから、エステルたちの方に視線を向けると、熱を帯びた瞳で睨みつけてきた。
「ふ……ふふふ」
口許が歪み、掠れた笑い声のような音をあげる。
「な、なによ、こいつ」
「こうなっては仕方ない……奥の手を使わせてもらうぞ！」

そう言って懐へと手を入れると、短い棒のようなものを取り出した。
棒の先端をエステルたちのほうへと向けて叫ぶ。
「時よ、凍えよ！」

時間が、止まった。

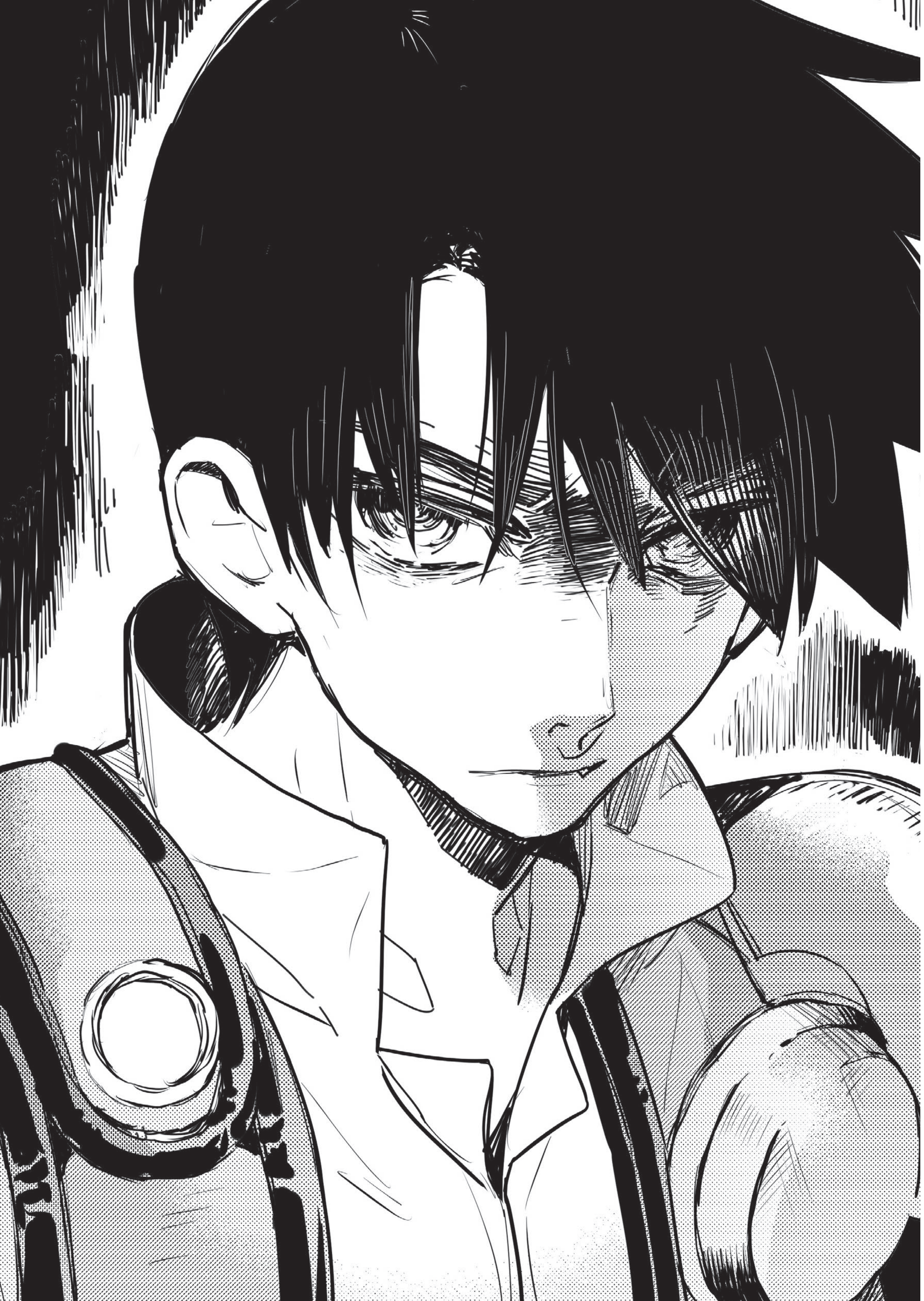
† † †

短い棒――短杖（ワンド）の先端が白く輝き、エステルたちを包み込むように白い光が部屋に満ちた。
まぶしさに思わず目を瞑ってしまう。
エステルの身体全体に違和感のようなものがまとわりついた。まるで水中に放り込まれたかのように、何かがエステルたちの全身を包んだ。
白い輝きが収まる。
ニタリといやらしい笑みを浮かべ、ダルモアは片手にもった短杖をもう片方の手に打ち付けながら、エステルたちを見つめていた。
ダルモアの方へ足を踏み出そうとしてエステルは気づく。
「か、身体が動かない……！」

全身に薄い皮のようにまとわりつく何かに邪魔をされて指ひとつ動かせない。
「こ、これは……導力魔法（オーバルアーツ）なの、か？」
ヨシュアが辛うじて驚愕らしき表情を顔に浮かべて言った。顔の筋肉さえも楽に動かせる状況ではないからだ。
「くっくっく……」
低い声でダルモアが笑っていた。怒鳴りつけたいが、言葉をしゃべるのも億劫だった。
「これは恐らく……《古代遺物（アーティファクト）》の力」
クローゼが絞り出すような声で言った。
ちらりと横目で窺うと、部屋の隅に逃げていた執事のフィリップにいたっては、立ち上がることもできないようだ。その脇でデュナン公爵が気絶していた。魔獣が姿を見せた瞬間から声がしなくなったと思ったら……。間違いなく今もっとも幸福なのはあの公爵だろうとエステルは思った。気絶していれば身体が動かせなくとも問題ない。
「《アーティファクト》……だと⁉　なんだそりゃ……」
ナイアルの声にも力がなかった。
一転して有利になったダルモアが杖を見せびらかしながら言う。
「ふっ、その通りだ。これは我がダルモア家に伝わる家宝の《アーティファクト》。一定範囲内にいる意志ある者の動きを完全に停止する力があるのだよ」

それは要するに人間の行動だけを封じ込めるということだ。
「な、なんてデタラメな力……」
「さすがは古代文明の叡智の結晶だと思わんかね。遊撃士の持つ導力器ごときとは比較にならぬ力を備えている……。まあ、《アーティファクト》の多くは、ひとつにひとつの機能しか持ってないのが些細な難点だがね」
懐に短杖を戻すと、代わりにダルモアは導力銃を取り出した。
「まったく、こういうときのための番犬を台無しにしてくれおって……。仕方ないから、君たちの始末は私自らの手で行ってあげるとしよう。くくく、光栄に思うのだな」
そう言いながら、銃口をエステルへと向けた。
「まずは、生意気な小娘からかな？」
「むっ、な、何が生意気よ！」
喉の奥から絞り出した声は掠れていて、悔しいが怯えているように聞こえてしまう。
エステルは唇を噛む。すっかり油断した。魔獣を二体、倒したところで勝負あったと思ってしまっていた。それでこのざまだ。
（悔しいぃぃぃ！）
ぎりりと奥歯を噛むが、相変わらず指ひとつ動かせない。
絶対絶命だ。

ダルモアはエステルからクローゼへと視線を動かし、
「そうしてから最後に、そちらの賢しらな小娘の息の根を止めるとしようか？」
クローゼは一言も言わずに黙って睨み返していた。
「どうした？　命乞いでもすれば助けてやらんでもないぞ？　たぶんな」
「だ、誰があんたなんかに……」
「ほう……まだそんな口を訊くか」
ダルモアがエステルに近寄ってくる。舐めるように足下から顔へと視線を動かすと、にたりと微笑んだ。背筋にぞくりと寒気が走る。
「侘びのひとつも入れられんとは、教育のなってない小娘だな……。すこししつけを叩き込んでやらんといかんかな？」
握る導力銃がダルモアを強気にさせていることは間違いなかった。
（こっちが動けないと思って……！）
「……るな……」
ヨシュアの声だ。
その声にエステルははっとしてしまう。
まさかと思ったのは、いつもの耳に馴染んだ声とあまりに違っていたからだ。
「汚い手でエステルに触るな……」



いつもの静かな、耳に心地良いヨシュアの声とは思えない声だった。
凍てついた氷をさらに研ぎ澄ませて尖らせたような……近づくものをすべて切り捨ててしまう刃のような……。昏い昏い黄泉の淵から呼びかけてくるような声だった。
「なに？」
ダルモアがヨシュアを見た。
「もしも……毛ほどでも傷付けてみろ……ありとあらゆる方法を使って、あんたを八つ裂きにしてやる……！」
「な……」
「ヨ、ヨシュア……」
そんなぎらついた目で人を見るヨシュアは初めてだった。視線で相手を殺してしまいそうな──暗い炎が瞳の中で燃えている。
「ヨシュアさん……」
クローゼの驚いた顔がヨシュアの変貌ぶりを物語っている。
「ゆ、指一本も動かせぬくせに意気がりおってからに……」
それは事実だった。
睨み返すのが精一杯で相変わらずエステルの身体は指ひとつ動いてくれない。
声も辛うじて絞り出している始末。握っている《六角棍》も、手のひらに貼りついているだ

けで、思うように動かせない。
「いいだろう！　貴様の始末を先にしてやる！」
ダルモアの銃口がヨシュアに向いた。
「や、やめなさいよ！　ヨシュアを傷つけたら、あたしだって絶対に許さないんだからね！」
だが、男二人は睨みあったまま言い合うのだ。
「……やってみろ」
「言ったな！」
ダルモアの瞳がぎらりと光る。指が引き金にかかり、今にもそこに力が込められるところだ。
「死ね」
押し殺した声で言った。

「だめえええええええええっ！」
喉の奥から絶叫が迸る。
その瞬間だ。
エステルの身体から、黒い閃光が放たれたのだ。

†　†　†

それはまさに〝黒い光〟だった。漆黒の輝きが部屋を充たしてゆく。
エステルの身体を中心として放出された黒い光は、放射状に広がっていって、あたりを闇で染めていった。
手の先が闇に呑みこまれて見えなくなり、顔をあげると辛うじて見えていたダルモアの姿が黒い光に呑まれるところだった。
周りに人の気配は感じるのだけれど何も見えない。まるで星のない夜の下に放り出されてしまったかのよう。地下に閉じ込められたような息苦しささえ覚えてしまう。
乾いた音が響く。ダルモアの驚いたような声が聞こえた。
唐突に闇が消えて、あたりの風景が色を取り戻した。
エステルはほっとすると同時に気付いた。
「身体の自由が……戻った？」
「な、んだと……」
ダルモアの呆然とした声。
懐から取り出した短杖を呆けたような表情で見ている。
杖は中ほどから砕けて折れていた。
「エステル……今の黒い光は？」
ヨシュアが振り返って問いかけてくる。思い当たるのはひとつだけだった。

「これ、だと思う」
　懐から取り出したのは、父宛てに届いた小包の中に入っていた黒い球体。
　漆黒の導力器（オーブメント）。
「これが光ったみたいだけど……」
　理由も理屈も判らないが、手のひらの導力器（オーブメント）を見つめながら、なんとなくそう確信していた。
そういえば、この導力器を《アーティファクト》かも、とオリビエが言っていたような……。
「くっ。そんな馬鹿な……《アーティファクト》が壊れるわけが……」
「どちらにせよ……あなたの切り札はもうない」
　ヨシュアが両手の短剣を構えながら言った。もう油断はしない、というしるしだ。
　漆黒の導力器（オーブメント）を懐に戻し、エステルも棍を構えた。
「諦めて捕まってください」
　クローゼが静かに諭した。
「……だれが捕まるものか！」
　ダルモアが持っていた銃をエステルに向かって投げつけてきた。
「なっ！」
　まさか唯一の得物を投げ捨てるとは思わなかったが、油断はしていなかったからエステルは棍棒でなんとか弾くことができた。

　しかし、その隙にダルモアは魔獣が出てきた部屋に跳びこんでいたのだ。
「あ、待ちなさいよ！」
　勢いよく扉を閉めてくる。
「待て！」
　ヨシュアが先頭に立って飛び出す。
　取っ手に手をかけて引くと簡単に開いた。鍵を掛けていない。だが部屋の奥にはさらに扉があってダルモアは既にその扉を開けて逃げるところだった。
「なんて往生際が悪いのよ！」
「追いかけるよ！」
　ヨシュアが言った。
「うん！」
「はい！」
「あ、おい、待ちやがれ！」
　ナイアルが言ったが、待っている余裕はない。
　奥の扉を開けると廊下だった。
　駆け去ってゆくダルモアの背中が見える。あっという間に角を曲がって、屋敷の裏手のほうへと向かっているようだ。

（逃げ足だけはめちゃめちゃ速いわね、あいつ！）
後を追うエステルたちの目の前でまたも扉が閉まった。
「しまった！　この音は……！」
扉に駆け寄ったヨシュアが、何かの音を聞き取って顔色を変える。
屋敷の裏手に続くその扉を開けると、ヨシュアが唸ったわけが判った。
目の前には川からの引き込み水路が流れており、ダルモアがヨットに乗り込むところが見えた。導力船らしく導力機関の立てる重い音が聞こえてきた。細かく船が揺れている。
ヨシュアが訊き取ったのは導力機関を動かす音だったのだ。
にやりとこちらを見て笑うダルモアにエステルの体温があがった。
「こらー！」
叫んだからといって止まるわけもなく、水面をすべるようにしてヨットが走り出してしまう。
「ま、待ちなさいっての！」
「怒るのは後に。エステル、こっちも追うよ！」
ヨシュアが水路に繋がれている小さなボートをもうひとつ見つけ、飛び移った。そのまま後部にある導力機関のスイッチを入れる。
「さあ！」
その声を聞く前にエステルもボートに飛び乗っていた。振り返ると、クローゼも飛び移って

くるところだ。揺れるボートの端に着地したクローゼの身体が傾く。慌ててエステルは両手を伸ばして支えた。
「行くよ！」
小さなボートで大きなヨットを追う水上の競争が始まった。
「こらー！　俺も乗せやがれってんだ！」
背中に聞こえるナイアルの声が遠ざかっていく。

狭い水路を抜け、ルビーヌ川へと入る。
ヨットとの距離は一セルジュほど。かなり離されてしまった。
だが、目の前に《ラングランド大橋》が見えてきた。エステルはしめたと思う。ダルモアのヨットは中型船だ。とても大橋の下をくぐることはできない。
「追い詰めた！」
「いや……まずいなこれは」
ヨシュアが悔しそうに言った。
「なんて悪運の強い……」
クローゼも唇を噛む。
おりしも正午の鐘が聞こえてきて、ラングランド大橋が真ん中から二つに割れ、橋が上がり

始めたのだ。
大橋が上がるのを見て、ダルモアのヨットが加速した。
エステルたちのボートも必死で追いすがる。導力機関の荒い息遣いが耳に響いた。
（海だ！）
左右に分かれた橋が、まるで両手を広げて海へと誘っているように見えた。
（逃がさないわよ！）
エステルたちは海に出る前に捕まえたかった。広い外海に出られたら逃げられてしまうかもしれないからだ。それにエステルたちの乗る小さなボートでは外洋航海までは無理だ。
導力機関を操ってヨシュアはぎりぎりまで速度をあげる。
白い波を蹴立ててエステルたちのボートは進む。
徐々にヨットとの距離が詰まり始めた。
「近づいてきた！」
「やはりこちらの方が船体が軽いみたいですね」
ヨット後方に陣取ってダルモアがエステルたちのボートを見ている。
徐々に差を詰めているのが判るのか、ダルモアは船室（キャビン）にとって返すとなにやら抱えて戻ってきた。まるで大きな銃のような……。
（あれって……まさか）

（導力機関銃（オーバルマシンガン）！）
銃口がちかちかと光り、少し遅れて重い音が鼓膜を叩いた。
悲鳴を上げるのをなんとかこらえた。導力機関のあげる騒音を切り裂いて、機関銃の弾がエステルたちのボートに襲い掛かってきたのだ。
「くそっ！」
ヨシュアが懸命に舵を切ってボートを蛇行させた。
川面に幾つもの細い水柱が上がる。
だが、危ないのは危ないが揺れるヨットの上から撃ってそうそう当たるはずもない。一発も被弾しないうちに、あっという間に弾が尽きたようだ。
「む、無茶苦茶するわね〜。でも、さすがにこれでもう打つ手がな……」
ごう、と耳元を風が過ぎ、エステルの髪をさらった。
「風が……出てきました」
クローゼが言った。
見れば、ダルモアの操るヨットの帆がいつの間にかいっぱいまで膨らんでいる。
「あ、あれ。あれれ。なんか、遅れてきてない⁉」
「これは……沖合を流れる風です。たしか今の時間は、港のほうから外海に向かって吹いているはず」

　エステルたちのボートが遅れているのではなかった。
　導力機関の力に加えて、風を受けて帆の力が加わったために、ダルモアのヨットの速度が上がったのだ。
「まずいな、こうなったらヨットの方が断然有利だ……」
「あんですってぇ！」
　エステルは歯噛みするがどうしようもなかった。
　半セルジュまで詰めていた距離がゆっくりと開いてゆく。ダルモアが後部甲板に立って笑っていた。
　声が風に乗って聞こえてくる。
「空の女神（エイドス）は私のほうに微笑みかけてくれたようだな！」
　そんな馬鹿な、とエステルは思う。
（女神さま！　あんなヤツを見逃すなんてありえないわ！）
　テレサ院長や子どもたちの哀しげにしていた顔が交互に浮かぶ。あの人たちにあんな顔をさせた奴がのうのうと逃げ切るなんて！　エステルは祈る。誰でもいいから、あいつを捕まえて欲しかった。一度は追い詰めたはずなのに……。
　だが、現実に距離はどんどん離れてゆく。
　握る拳が震えていた。ここまできて！

「なんだ、この音……」
　ヨシュアが言った。
「音……？」
「来た」
　ぽつりとクローゼがつぶやいた。
　そのときボートに巨大な影が落ちた。
　一瞬遅れて、導力機関のあげる爆音が頭の上で鳴り響く。
「な、なに……？」
　エステルは反射的に顔を上げて空を見る。流線形の巨大な物体が真上にあった太陽も青空の大半も隠してゆっくりと通り過ぎてゆくところだった。
　今度こそほんとうにエステルは驚いた。口をぽかんと開けたまま見つめてしまう。
　頭上を通り過ぎてから船尾が見えてきて徐々にその巨大な船の形が判ってくる。
「ひ……飛行船？」
　クローゼがつぶやく。
「リベール王国軍の親衛隊が所有する高速巡洋艦《アルセイユ》です」
「親衛隊の高速巡洋艦……女王陛下の懐刀にして、王国軍の切り札と言われる船か」
　ヨシュアが飛行船の船尾を見つめながら言った。

「《アルセイユ》の最高速度は時速三千六百セルジュ。もう、逃げられません」
クローゼの言うとおりだった。
あっという間に《アルセイユ》はダルモアの乗っていたヨットを追い越し、進路上に着水するとヨットを封じ込めた。
蒼と白の軍服——女王陛下に仕える親衛隊の証——に身を固めた兵士たちがヨットに雪崩れ込みダルモアを拘束してしまう。
背の高い女性士官が甲板上に姿を現した。
ようやく追いついたエステルたちに向かって声をかけてくる。
「やあ、遊撃士諸君。諸君の協力を感謝する」
にっと笑って敬礼をしてくる。
その女性士官は王国軍親衛隊の中尉を務める者だと名乗り、「後のことは我々に任せてくれ」と言った。
男っぽい喋り方をする女性士官はユリア・シュバルツと名乗った。

こうして、孤児院放火から始まったダルモア市長のたくらみは今度こそ潰えたのだった。

幕間

「記憶が曖昧だった？　自分がしたことを覚えてないってことかい？」
ジャンが尋ね、エステルはヨシュアと揃って頷いた。
カウンターの向こうでジャンが首を傾げる。
エステルたち——エステルとヨシュアとクローゼは、遊撃士協会の支部まで戻ってきていた。
すでに昼というよりも、午後のお茶の時間に近い。
あのあと——。
波止場に戻ってからエステルたちも取り調べを受けた。といっても簡単な経緯を説明させられただけだ。詳しいことは遊撃士協会を通して報告書を出してもらうと言っていた。
聞き取りが終わって休んでいたエステルたちのところに、《アルセイユ》の甲板上から挨拶をしてきた女性士官——ユリア中尉が近寄ってきて、
『市長を問い詰めたのだが、どうやら記憶が曖昧になっているようだ』
と伝えてきたのだ。
その場には一般人であるクローゼもいたし、ようやく追いついたリベール通信社の記者ナイアルもいたのだが、ユリアは気にしていないようだった。ナイアルはこれ幸いと熱心にメモを取っていたっけ。

それともそこまでは公にできる情報ということだったのだろうか。
気にはなったけれど、エステルにはもっと気になることがあったので、深く考えなかった。
そのもっと気になることというのが……。
「空賊の首領もそんな感じだったのよね」
エステルはぽつりと言った。
ジャンがいぶかしげな顔をするので、エステルとヨシュアは、前に戦った空賊たちについてざっと話して聞かせる。
霧降り渓谷の砦でエステルたちと戦った空賊の首領も、気を失って目を覚ましたときには自分が何をしたのか覚えていなかったのだ。
ヨシュアが言った。
「あの黒装束たちといい、何か関係があるかもしれないね」
「まあ、これから取り調べでもっと詳しく判るんじゃないかな」
ジャンは楽観的な性格のようだ。
「あ、それでね。ユリア中尉と話していたら、そこにあの人がやってきたのよね」
あの人——情報部将校のリシャール大佐だ。霧降り渓谷でエステルたちの先回りをして空賊たちを捕まえた彼が、またも現れたのだ。背後には影のように付き従うカノーネ大尉もいた。
聞けばちょうどレイストン要塞にいて連絡を受けたのだという。

リシャール大佐は取り調べにレイストン要塞を使うようにと言った。
「えっ。わざわざレイストン要塞に護送するのかい？《アルセイユ》で運べば王都にだってすぐだろうに」
「うん。親衛隊は女王様のためだけに働く部隊だから、こっちで預かるって」
「はー。お硬いねぇ」
ジャンの頭が柔らかいだけの気もする。
「要塞から大佐が来たのって、ジャンさんが連絡を入れてくれたからなんでしょ？」
「ああ、たぶんね。どうして親衛隊まで駆けつけたのかは判らないが……まあ、軍の連絡系統にも色々あるのかもしれないね。間に合ったみたいだから、どっちでもいいけど」
「それを言うならば情報部は本来、要塞勤務ではありませんし」
「それもそうだ」
ヨシュアの言葉にジャンが納得した顔になった。
「でも、今回の事件はこのあとが大変です……。今後、ルーアン地方の行政はどうなってしまうんでしょうか？」
暗い声で言ったのはクローゼだ。
「あ、そうか……。市長が逮捕されちゃったし」
「とりあえずは王都から代理の市長が派遣されると思う。その後はダルモアの有罪が確定すれ

ば、いずれ選挙が行われるだろうね。あと、孤児院については正式な補償が行われると思うよ」
ジャンが請け負ってくれた。
クローゼの顔にようやく安堵の色が広がる。
「これも皆さんのおかげです。本当にありがとうございます」
そう言って深々と頭を下げる。
「水くさいこと言わないでよ」
「そうだね。当然のことをしただけさ」
エステルたちの言葉に、クローゼは柔らかい笑みを浮かべた。その微笑みだけで、エステルの苦労など吹き飛んでしまう。
照れくさかったので話題を変えた。エステルはジャンに尋ねる。アガットのその後についてだ。気になっていたのだ。ジャンの話によれば……。
アガットからは導力通信で連絡が入ったという。
黒装束の男たちは残念ながら取り逃がしてしまったらしい。他に仲間がいたらしく待ち伏せされたという。襲撃を辛うじてはねのけて、そのままツァイス方面に向かって連中を追跡中らしかった。
「タフね～」
エステルは感心してしまった。偉そうな態度をするだけはある。

ジャンがぽつりと言った。
「実は、しばらく前から、アガットはあの連中を追いかけているんだ。どうやら、君たちのお父さんに頼まれた仕事らしいけどね」
寝耳に水の言葉にエステルは驚いた。
「父さんの依頼でアガットさんが動いているんですか?」
ヨシュアの問いかけは、どうしてアガットが父カシウスの頼みで仕事をしているのか、という意味だ。
「ふふ、《レイヴン》にいたアガットを更正させたのは他ならぬカシウスさんだからね」
「そうだったの!?」
「だから頭が上がらないのさ。まあ、ああいう性格だから感謝なんてしてない風を装っているけれどね」
「なるほど……僕らに対する厳しい態度もそれが原因かもしれないですね」
「じゃあ、やっぱり父さんのとばっちりじゃないのよっ!」
あのオヤジはぁ、とエステルは頬を膨らませた。そんなエステルを見て、クローゼがくすくすと笑う。ようやく明るい顔をした彼女に、エステルはほっとしてしまった。
「あ、父さんで思い出した!」
「ああ、あれだね」

エステルは懐から黒い球体を取り出した。
「色々ありすぎて、つい忘れちゃっていたけど……コレ、いったい何なのかしら？」
「おかげで助かったけど、少し不気味な感じはするね……」
手のひらの上の真っ黒な球体を見てジャンも不思議そうな表情を浮かべる。
「珍しい色の導力器（オーブメント）だね。どういった由来の物なんだい？」
ジャンに問われて、エステルは改めて黒い球体を手に入れた経緯を話した。
父カシウス宛てだった小包の中に入っていた品だということと、添えられていた手紙に書かれていた謎のメッセージのこと。

『例のサンプルを入手した。
しばらく保管をお願いする。
機会を見て、R博士に解析を依頼して頂きたい。
K』

話し終えると、クローゼが「そんなことが……」と驚いたような顔になった。
黙って聞いていたジャンが天井を見上げて言う。

「ふーむ、R博士にKか……ひょっとしたら……」
「えっ、なにか心当たりがあるの？」
「心当たりというほどじゃないんだが……。その件について調べたいならばツァイス地方に向かった方がいいかもしれない」
「ツァイス地方？」
「というか、ツァイス市だね。知っていると思うが、あそこは導力器（オーブメント）の生産で有名な土地だ。『工房都市』という名が付けられているほどでね。博士の肩書を持っている人も多い」
ヨシュアがなるほどという顔になった。
「R博士ですね」
「その市にいるかもってこと？」
「そういうこと。それに、たとえそのR博士がツァイス市にいなかったとしても、その黒い球体の正体が知りたければ、あの工房都市以外を訪れても無駄だろう。ツァイス市こそがリベール王国最大の導力器（オーブメント）生産地だからね」
ジャンの言葉を聞いて、胸が高鳴らなかったかといえば嘘になる。ここまで振り回されてきた感のある黒い球体の正体が判るかもしれないのだ。
だが――。
「あたしたち……この街でまだ修行する必要が……」

「いや、そうでもないさ。ほら、これ」
　軽い調子で言いながら、ジャンがひらりと一枚の書類を渡してきた。受け取って、書面を眺めて、エステルは目を剥いた。
「こ、これ……！」
「うん。ルーアン支部からの正遊撃士資格の推薦状さ。心配しなくても、ちゃんとヨシュア君のぶんもあるよ」
「いえ、心配はしていませんでしたが……いいんですか？」
　ヨシュアが言った。
「君たちは、空賊事件を解決してボースでそれをもらったろう？　同じだよ。これだけの大事件を解決されちゃ、うちとしても渡さないわけにはいかないからね」
　ジャンが小さな声で、優秀な正遊撃士が早く欲しいのは本音だしね、と言った。
　エステルとしては、自分がそんなに期待されるほど優秀だと言える自信はなかったが……。
（でも、これでツァイスに行ける！）
　単純に嬉しいのは確かだ。
「良かったですね。エステルさん、ヨシュアさん。淋しくなってしまいますけど……」
　はっとなってクローゼを見る。そうだった。ツァイスに向かうということは、仲良くなったクローゼともここでお別れということなのだ。

「クローゼ……」
「あは。わがまま言ってごめんなさい。ただ……せっかく仲良くなったのにな、ってちょっと淋しかっただけです」
「そんなこと……。あたしも仲良くなれて嬉しかった！」
「エステルさん……」
　どちらからともなくそっと手を握り合った。
　マノリアの村で出会ってから、孤児院で再会し、ルーアンの街まで案内してもらった。
　不思議な偶然が続いて、本来ならば経験できるはずもなかった学園生活を共に過ごすことになり、お芝居まで一緒にやって仲良くなった。同年代の女の子の知り合いが少ないエステルには嬉しい女友だちだったのだ。
　孤児院放火事件の謎を一緒に解き明かし、共に戦い、ボートに乗って市長を追いかけた。
　クローゼ・リンツ――王立学園首席にして、遊撃士にも負けない細剣（レイピア）の使い手。シロハヤブサのジークを友人に持つ少女。
　エステルはクローゼのことをこの先もずっと忘れないだろうと思うのだ。
　胸がいっぱいになった。
「ツァイスに行っても手紙を書くね」
「私も書きます。……遊撃士協会の支部宛てで届きますよね？」



そっとつかんでいた手を固い握手へと替える。

エステルはツァイスに向かう決心を固めた。

黒い導力器（オーブメント）の正体を突きとめ、父の行方を追うのだ。この謎の背後には、きっとあの黒装束の男たちも潜んでいる。

それらを解決した先に、正遊撃士への道もあるだろう。

「ヨシュア……」

「君の言いたいことは判ってるさ、すぐにでも行きたいんだろう？」

「うん！」

こうしてエステルとヨシュアは、青と白に彩られた『海港都市』ルーアンを離れて、リベール王国最大の『工房都市』ツァイスへと向かうことになったのだ。



発行:フィールドワイ　フィールドワイ公式HPはこちら⟶www.field-y.co.jp
発売:メディアパル　ファルコムブックス公式HPはこちら⟶www.field-y.co.jp/falcombooks

ナイアル＆ドロシーコンビの今度の取材紀行は『SC』が舞台！



英雄伝説 空の軌跡 リベール王国スナップショット 2

『英雄伝説 空の軌跡』のリベール通信社で働く記者のナイアルとカメラマンのドロシーが繰り広げるリベール取材紀行の第2巻。『空の軌跡SC』の世界を舞台に、凸凹記者コンビのふたりが訪れた街で出会う様々な人々との交流を描いていく。今回はティータやレン、ミュラーといった人気キャラクターも続々と登場。

好評発売中!!

1,300円+税

判型：B6正寸　並製ページ数:304
ISBN：978-4-8021-3004-2
発行元:フィールドワイ　発売元:メディアパル

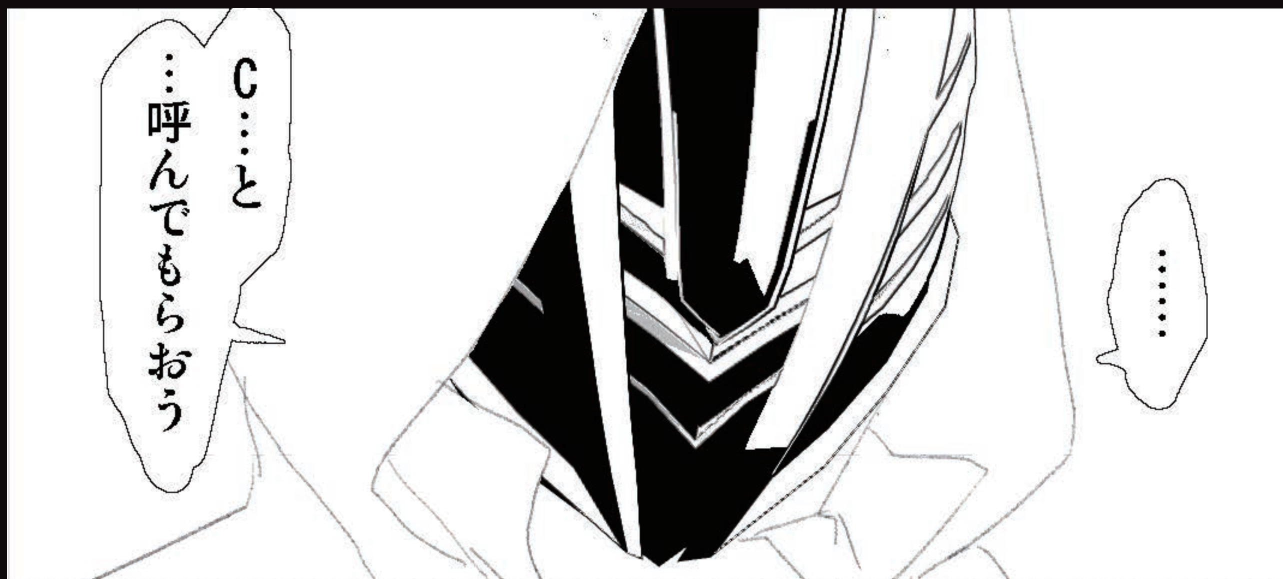
特報



次号より、

『英雄伝説 創の軌跡』

コミック新連載スタート!



刮目して待て！

FALCOM MAGAZINE SPECIAL プレゼント!!

アンケートにお答えいただいた方から抽選で
ここでしか手に入らないアイテムをプレゼント！



5名様

『も～っと集まれ！ファルコム学園』缶バッジ

大人気!! オリジナル缶バッジを5個セットで5名にプレゼント!（※絵柄はランダムです）

ご応募は特設サイトまで▶ **http://www.field-y.co.jp/root/falmagap/**

メールでご応募の場合は下記フォーマットに記入のうえ、（falmaga@field-y.co.jp）まで
お送りください。当選者には編集部よりメールにてお知らせ致します。

件名：vol.119プレゼント係

1：お名前（ペンネーム可）
2：面白かった記事の番号→
　つまらなかった記事の番号→
　（記事一覧から１つずつ）
3：アンケート①「英雄伝説 黎の軌跡」発表！ 率直な感想は？
　アンケート②「英雄伝説 黎の軌跡」の舞台・カルバード共和国のイメージは？
4：希望するプレゼント番号
5：ご意見・ご感想など

記事一覧

1：黎の軌跡最新情報
2：も～っと集まれ！ファルコム学園
3：英雄伝説 空の軌跡SC～絆の在り処～
4：ファルコムニュース
5：暁の軌跡最新情報
6：英雄伝説 空の軌跡

応募締め切り　1月25日（月）

メールにてお送りいただくお名前やご住所等の情報は、商品の発送のためにのみ利用し、そのほかの目的には利用致しません。
また、情報は応募締め切り後3ヶ月を越えて保有することはありません。



月刊 FALCOM MAGAZINE Vol.119

発行人 田中一寿

発行協力 日本ファルコム株式会社

編集 小渕智幸
河野崇

デザイン・DTP 株式会社 ACQUA

表紙ロゴデザイン 荻窪裕司（デザインクロッパー）

発行 株式会社フィールドワイ
〒101-0062
東京都千代田区神田駿河台3-1-9　日光ビル3F
TEL 03-5282-2211（代表）
http://www.field-y.co.jp/